

平成 25 年度

自己点検・評価書
(学校評価報告書)

附属池田中学校

1 附属池田中学校の現況

(1) 学校名

大阪教育大学附属池田中学校

(2) 所在地

大阪府池田市緑丘 1-5-1

(3) 学級数・収容定員

12 学級 (1 学年 4 学級) 収容人数 480 人 (1 学級 40 人)

(4) 幼児・児童・生徒数

480 人 (男子 240 人・女子 240 人) ※平成 25 年 12 月 1 日 現在

(5) 教職員数

校長 (併任) 1 人 副校長 1 人 主幹教諭 1 人 教諭 20 人 (うち、臨時的雇用 1 人
育児休業 2 人) 非常勤講師 7 人

事務職員 5 人 (専任 1 人 事務補佐員 1 人 臨時的事務員 3 人) 臨時的用務員 2 人

2 附属池田中学校の教育目標

人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を
培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満
ちた生徒の育成

3 附属池田中学校の使命

- (1) 教員養成大学である大阪教育大学の研究校である。
- (2) 大阪教育大学の学生の教育実習校である。
- (3) 現職教育への奉仕をする学校である。
- (4) 常に新しい教育理念と中正な教育的信念をもち、望ましい環境の内に個性を生かしながら、真の中等普通教育を実施することを目指している。
- (5) 一般生徒、国際枠生徒 (帰国生徒、在日外国籍生徒)、学校災害特別研究生徒からなる混合学級で授業を行い、新しい教育の開発を目指している。

4 附属池田中学校の教育方針

(1) 自主・自律につながる学びの基礎・基本の確立

教員と生徒、生徒相互のよりよい関係を確立し、自由な校風の中、自主・自律の精神を培い、自ら求め学ぼうとする態度の育成を目指している。

(2) 確かな学力の育成

基礎的・基本的事項を定着させるとともに、体験的、問題解決的な学習の充実をはかり、学ぶ意欲や思考力まで含めた「確かな学力」の育成を目指している。

(3) 自他の文化の理解・共生の心の涵養

国際社会の中で、異なる文化を理解し、共に生きてゆける豊かな国際感覚をもった生徒の育成を目指している。

5 附属池田中学校の学校教育計画及び本年度の重点目標

(1) 共同研究「つながり、かさなり、ひろがる授業～12年間の「知」の構築をめざして～」の推進および各自の研究力の向上

◎小学校・高校とのカリキュラムの連続性を意識した共同研究の推進

◎各教科・領域における評価(評価基準・評価規準)研究及び積極的な研究の継続・推進

◎小学校・高校とのカリキュラムの連続性を意識した共同研究の推進

◎各教科・領域における積極的な研究の継続・推進

(2) 授業力の向上

◎月1回以上の授業研究の実施

◎言語活動を取り入れた授業の実践

◎生徒の思考力・判断力・表現力を育む授業づくり

(3) 安全・安心な学校づくり

◎ISS認証取得に向けた学校安全組織の確立、PTA等の関係機関との連携強化

◎安全管理の推進

◎安全教育の充実

(4) 自主・自律の精神の涵養と様々な他者との人間関係を深める取組の推進

◎自己肯定感を育み、互いを尊重しあう人間関係の育成

◎異なる文化や価値観を認め合い、自他ともに大切にできる態度の育成

(5) 生徒との信頼関係を基にした内面に迫る生徒指導、規範意識の向上と生活規律、学習規律の徹底、いじめや不登校への対応

◎生徒理解に基づく積極的な生徒指導の実施

◎生徒の規範意識の醸成および自他を尊重する集団づくり

◎いじめ・不登校のない学校づくり安全・安心な学校づくり

(6) 教育実習の充実

◎教職を望む学生の資質の向上

(7) 適切な組織運営、開かれた学校づくり、保護者・地域との連携

◎機能的・機動的な組織運営

◎開かれた学校づくりの推進

◎保護者・地域との連携

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	おおむね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校教育目標	人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成	自己点検評価を主体的に行う分掌
学校教育計画	1. 共同研究「つながり、かさなり、ひろがる授業」の推進および各自の研究力の向上	

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策	
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価		
(1)小学校・高校とのカリキュラムの連続性を意識した共同研究の推進	①各教科において、小学校教員・高校教員と連携を図り、カリキュラムづくり・授業づくりを行う。	共同研究という意識が、3校種それぞれに根付いたと感じられた。研究大会に向け、共通する単元やテーマで3校種が授業発表を行うなど実質的な連携が図れた。	連携をさらに深め、3校種の教科間で互いの授業を参観できるような体制を構築したい。	B	以前に比べも連携が進んでいるように感じた。	B	共同研究の教科部会、教科リーダー会で相互授業参観等の連携を更に深める取組について協議を図り具現化していく。	研究
	②各教科において、小学校教員・高校教員と連携を図り、研究協議を行い次年度に生かす。	これまでに各教科のリーダーを中心とした小中高連携での教科研究体制が確立している。さらに今年度は、月に1回以上の小中高教科研究会を設けることができた。	今年度行った月1回の小中高教科研究会をもとに、来年度は、各教科で自主的な研究会の開催を行っていただけるようさらに研究部より呼びかけていく。	A	発展的な取組の推進を期待したい。	A	全体のテーマ設定に沿った各教科のテーマを設定してもらい、自主的な研究会を促していく。	研究
(2)各教科・領域における積極的な研究の継続・推進	①科学研究費助成事業(奨励研究)に8人以上応募し、30%以上の採択率を達成する。	今年度も、昨年度に引き続き、10名という高い応募率を保つことができた。研究校の教員として、この様な研究費助成事業には積極的に参加する意識が全体に定着してきている。	今後とも、応募件数について高い数字を維持しながら、それと同時に、研究部が主体となり、さらなる質の向上に努め、採択率の向上へつなげたい。	B	高い応募件数が継続していることは評価できる。採択実績についても努力願いたい。	B	昨年度に引き続き、高い応募件数を維持しながら、採択率が上がるように、大学の先生や採択経験者からの助言を受ける。	研究
	②全教員が年1回以上、研修会に参加し、成果報告会における意見交流を活発化する。	ほぼ全員が、全国各地で開催された研修会に1回以上の参加し、得られた成果を本校研修会で報告することができた。	今後とも、研究部より、さらに参加を呼びかけ、他校の実践を本校の研究に活かせるようにしたい。	B	継続性、発展性を期待したい。	B	本地区の研究テーマに関連した意見交流を成果報告会で行う。	研究

学校教育目標	人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成	自己点検評価を主体的に行う分掌
学校教育計画	2. 授業力の向上	

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策	
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価		
(1)言語活動をとり入れた授業の実践	①全教員が年1回以上、研究授業を実施する。また、月1回以上の研究授業を実施する。	計画通り、月に1回以上の研究授業会、並びに全員の教員も年に2回以上の研究授業を実施することができた。	来年度においても、校内定期授業研究会を継続し、さらに教員同士が互いの授業を気軽に参観できる体制を作りたい。	A	互いの授業気軽に参観できる雰囲気継続することが大切である。	A	協議するテーマを設定し、協議内容の質の向上に努める。	研究
	②研究授業実施にあたり、教員全員で指導案の検討を図り、研究協議会では全教員が協議会の質が高まる発言を1回以上する。	校内定期授業研究会が月に1回以上行うことができ、その中で全教員による指導案検討並びに協議会における積極的な発言が見られた。	今後とも現在の形態を維持しながら、検討会・協議会のさらなる質の向上に力を入れたい。	B	量から質への転換の時期である。	B	テーマに沿った発言、また、協議が発展できる発言ができるよう、司会もファシリテーターとしての役割を果たす。	研究
(2)生徒の思考力・判断力・表現力を育む授業づくり	①生徒の学校評価アンケートから、80%以上の生徒に授業に関して満足感をもたせる。	学校アンケートの結果より、90%の生徒が「ほとんどの授業は内容や進度が適度でわかりやすい」と答えている。	アンケート結果では、「よくあてはまる46.7%」「ややあてはまる37.3%」を加えた数字が84.0%であるが、「よくあてはまる」の数値をさらに上げられるよう努めたい。	B	改善点の具体的は方法を考えていただきたい。	B	思考力・判断力・表現力の育成にテーマを絞った授業研究会および協議会を実施する。	研究
	②電子黒板(ICT)を積極的に活用した授業を進める。	各教科をはじめ、道徳、総合など、ほとんどの授業で活用実践が見られた。	今年度の実践を生かせるよう、電子黒板を活用した授業実践の交流が行える研修会を設置したい。	B	使用方法などを各自がしっかりと学んでいただきたい。	B	電子黒板を活用した実践の交流を図る。また、先進的な実践を行っている学校を視察する。	研究

学校教育目標	人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成	自己点検評価を主体的に行う分掌
学校教育計画	3. 安全・安心な学校づくり	

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策	
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価		
(1)ISS認証取得に向けた学校安全組織の確立	学校保健安全委員会の設立、学期に1回以上の会議の実施、保護者等と連携した取組の充実を図る。	保護者対象のPTA普通救命講習において本校教員が講師を務めたり、浅の登校時にはPTAの立ち番と本校教員の巡回指導を連携して行った。しかし、本年度設立した学校保健安全委員会の会議は2回の開催に終わった。	安全の取組は課題を明らかにしながら引き続き保護者等と連携して進めていく。また、学校保健安全委員会は定例化を図っていく。	B	全体の意識が高まり、取り組みが具体化しているところは十分に評価できる。	A	学校保健委員会の定例化、生徒会やPTAと取組みの連携を図る。	安全
(2)安全管理の推進	①年2回以上の防犯訓練、年2回以上の防災訓練を実施する。その際、実際に即した訓練の充実を図る。	防犯訓練、防犯訓練それぞれ所定の回数以上の訓練を行う事ができた。	生徒対象の防犯訓練について今後検討を進めたい。	A	ぜひ取り組みを継続していただきたい。	A	本年度と同様に実際の場面に対応できるように様々なことを想定した訓練を実施するとともにKYTを活用したより効果的な訓練を行う。	安全
	②学校安全マニュアルを改訂し、周知を図る。	訓練の際は紙もしくは電子媒体で学校安全マニュアルをご持参いただけたので、周知はできていたと考える。	iPadへの配布を行い、常に携帯している状況へ向けて取り組みたい。	A	様々な立場の人の意見も取り入れながら取り組みを行っていただきたい。	A	学校安全マニュアルの改定を行うとともに、生徒・保護者向けの学校安全マニュアルの作成を生徒会・PTAと連携を図りながら行う。	安全
(3)安全教育の充実	①小学校・高校と連携を図った防災学習を研究授業として実施する。	研究会において、災害安全を中心とした研究授業を行う事ができた。	今後、小学校での学習状況を再点検しながら、小中高で段階に応じた指導ができるようカリキュラム面で整理できたら良いと考える。	B	年齢に応じた効果的な教材や授業の開発を期待する。	A	小中高で発達段階に応じた防災を含む安全学習の系統化を図る。	安全
	②安全意識が向上し行動につながる安全教育を実施し、評価の充実を図る。	通学路におけるきKYTや災害安全に対する授業を実施することができ、ワークシートの記述から意識の啓発について十分な効果を見いだすことができた。	来年度以降も継続して実施できるようなしくみの整備を行うとともに評価の方法についてさらに検討を進めたい。	B	効果を上げるために、しっかりと評価していただきたい。	A	取り組みによって生徒の意識や行動がどのように変容したのかを分析し検証する。	安全

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	おおむね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校教育目標	人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成	自己点検評価を主体的に行う分掌
学校教育計画	4. 自主・自律の精神の涵養と様々な他者との人間関係を深める取組の推進	

本年度の重点目標(評価項目)	具体的な取組内容(評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)自己肯定感を育み、互いを尊重しあう人間関係の育成	①生徒の学校評価アンケートから、90%以上の生徒に学校生活に関して満足感をもたせる。また、学習・友人関係等の関連性について分析を行う。	・「楽しい学校生活が送れている」の問いに、「当てはまる」「やや当てはまる」と95.6%以上の生徒が答えた。 ・90%以上の生徒が学校生活を満足させるのは難しいが楽しく過ごしている生徒は74.2%、ややあてはまるという生徒は22.6%で楽しいという点ではほぼ達成していると思われる。小学校から中学校に上がり、今までとは違った生活になり戸惑うこともあったが、学習や行事など、様々な体験をする中で、自分とは違う考え方を知り、理解し成長しつつあるのではないかと。 ・アンケートの結果より、約95%の生徒が満足感を持っていることから数値的目標は達成できた。個々に問題を抱えている生徒もいるが、そういった生徒も落ち着いて学校生活を過ごしているのが何	・楽しくは生活できているが、「生徒はルールをよく守っている」の否定的な数値が約30%あり規範意識を高める必要がある。 ・ほとんどの生徒は楽しい学校生活を過ごしているが、いろいろな悩みを抱えている生徒はいる。そのことを伝える雰囲気づくりが必要である。(学級経営)教師がひとりひとりの生徒を大事に思い、普段から話をする機会をつくり丁寧に接していくことが大切。安心できるクラス学年にさらにしていかなければならない。 ・この数値を維持できるように、子どものようすを普段から担任をはじめとして見ておくこと、関心を向けること、学年教師内相互の連絡・報告・相談を欠かさないようにする	B	「学校生活に関する満足感」の度合いについてその要因を追求していただきたい。	B	次年度はさらに「学校生活に関する満足感」について、学習・友人関係等の関連性について分析を行う。
	②学級や学年の活動の場において、他者と関わり、互いの考えを交流したりする場面をできる限り設ける。	・「話し合ったり、意見を発表する授業がよくある」では96.9%以上の生徒が、「学活や総合等で生き方を考える機会がある」では88.7%以上の生徒が、「当てはまる」「やや当てはまる」と答えている。 ・学級活動や授業で言語活動の場があり、他者と関わり、意見を聞き、お互いを理解し合う場面が多かったと思う。集会などでも、自由発言の場をもうけ、生徒自ら、集会を行なう力もつきつつある。そのような場面から学級、学年共にひとりひとりの意見を大切にできているのではないかと。	・話し合ったり、意見を発表する授業がよくある」で否定的な数値が3.1%とほぼ0に近いが、「授業中に授業内容・目標・評価の計画を知らせている。」は否定的な数値が13.2%とあがるように、何のための話し合いなのかを提示しより目的意識を持たしたものとすることが必要である。 ・自分の考えをなかなか言えない生徒もいるので自信を持たせること、言える雰囲気づくりを大事にしたい。自ら動き思考する場をさらにもうけ、生徒の力を引き出すサポートをしていく。	B	「授業」に関する満足度が高いことは十分に評価できる。	B	話し合いや発表する場面における目的を明確化しながら場面設定を行う。
(2)異なる文化や価値観を認め合い、自他ともに大切にすることを意識する態度の育成	①生徒の学校評価アンケートから80%以上の生徒に国際生徒の経験が生かされている実感をもたせる。	生徒の学校評価アンケートでは約91%以上の生徒に国際生徒の経験が生かされている実感があるという結果が出た。	日々の学校生活で国際生徒の活躍は学校内で周知されているが、保護者に対してはやや発信不足の面があるので発信力を強化していきたいと考える。	B	日常的な場面ではどうなのか検証していただきたい。	B	日常的に国際生徒が活躍できる場面設定を追求する。また、保護者に対しても文書等で周知を図る。
	②真の自主・自律の確立、他者理解を深め、人としての誇りがもてる道徳教育を計画的・組織的に推進する。	・学校教育全体計画の整理し、各学年の重点目標に沿って授業を展開できた。 ・指導案(副読本中心)を学年会で検討し、実践できた。 ・職員室内に副読本を置き、授業内容の検討や打ち合わせに活用できた。 ・道徳の授業で意見を交流させたり、学級活動の場でも積極的な意見交流はできていた。各クラスの生徒の人間関係が安定していることから、意見を述べることに抵抗は少ないように感じる。ただ、意見の内容は3年生としては稚拙な点があることも否めない。	・担任だけでなく、学担も道徳の授業をし、実践の充実をはかりたい。 ・学年の枠を超えて、いろいろな先生の道徳の授業の様子を見にいきたい環境をつくる。 ・生徒の関心を引くとともに、能力を最大限活かせるような題材を設定できるようにする。総合もマンネリにならないよう留意する。また、良好な人間関係が築けるようなクラスの雰囲気づくりを心がける。	B	今の時代道徳教育は大切なので継続して取り組みを進めていただきたい。	B	道徳教材や指導案の共有化(データベース化)を図っていく。

学校教育目標	人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成	自己点検評価を主体的に行う分掌
学校教育計画	5. 生徒との信頼関係を基にした内面に迫る生徒指導、規範意識の向上と生活規律、学習規律の徹底、いじめや不登校への対応	

本年度の重点目標(評価項目)	具体的な取組内容(評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)生徒理解に基づく積極的な生徒指導の実施	①生徒の学校評価アンケートから、80%以上の生徒が教員の生徒理解に関して満足感をもたせる。また、会議の効率化を図る等の方策を教務部と連携しながらさぐり、生徒と教員が接する時間をより多くとる。	80%以上の生徒について満足感を持たせることができた。また、出席簿の電子化により、学期末の統計処理について、円滑化を図ることができ、会議時間の短縮に貢献できたと考える。	校内の情報共有システムを構築して、緊急を要する連絡のサポートができるよう対応していきたい。	A	「生徒指導」の項目の高さは十分な評価ができる。方策をさらに深化させてほしい。	A	校内の情報共有システムの活用法に関してさらに追求する。
	②共通認識・共通実践および保護者・関係諸機関と連携を図った対応を図る。	警察・メンタル、行政機関の子育て支援課等と連携をはかり、対応することができた。	今後とも関係諸機関との良好な関係を保つ。	A	継続した取り組みを期待したい。	A	関係諸機関との連携の事例を共有化する。
(2)生徒の規範意識の醸成および自他を尊重する集団づくり	①生徒指導委員会を軸に情報共有を図り、共通した指導を実践する。	定期的な生徒指導委員会を開き、特別支援を要する生徒のことまで含めて、情報の共有化を図ることができた。	特別支援委員会とも連携しながら生徒指導を行っていく方策を検討したい。	A	昨年度に引き続き「校則を守れていない」と回答している生徒が多いように感じ、気になるところである。	A	生徒の自主的活動とISS認証の取り組みを生徒会が中心になって取り組むことにより生徒の意識向上を図る。
	②生徒のリーダー性・自発性を育むように生徒会の活性化を図る。	ISSに向けた学校安全を中心に生徒会活動を活性化することができた。	各種委員会組織まで巻き込んだ活動を展開していきたい。	A	生徒会の組織を中心とした取り組みを展開していただきたい。	A	生徒会組織をより機動的な組織に改善していく。また、各委員会の取り組みの目的や内容について明らかにしていく。
(3)いじめ・不登校のない学校づくり	①「特別支援委員会」を充実させ、課題のある生徒の情報共有し、支援プログラムを作成する。	個別の指導計画を作成して特別支援教育委員会で検討を重ね、課題のある生徒の情報共有を学校全体で共有することができた。特別支援学校と連携し、専門家のアドバイスに基づいた支援を行った。	来年度は最も優先して取り組むべき課題を整理し、その課題に特化した研修を行う。	A	外部機関からチーム支援会議へのサポートを取り入れてはどうか。	A	昨年度に引き続き、チーム支援会議で議論した事柄について、メンタルサポートセンター等の専門家に指導を仰ぐ。
	②生徒の教育相談の機会である「ふれあいウィーク」を実施する。	担任を中心として学担・養護教諭・クラブ顧問など、常に開かれた相談窓口として機能させ、得られた情報は管理職やコーディネーターに報告・連絡・相談する道筋を確立し、学校全体で情報を共有することができた。	6月の総合週間後の1週間に行事を入れず、担任が生徒と個別の面談をすることが可能な環境をつくる。	A	継続的な実施を願いたい。	A	「ふれあいウィーク」だけに固守することなく、担任が生徒と個別の面談をすることが可能な環境を設定する。

学校教育目標	人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成	自己点検評価を主体的に行う分掌
学校教育計画	6. 教育実習の充実	

本年度の重点目標(評価項目)	具体的な取組内容(評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)教職を望む学生の資質の向上	①教科指導や学級指導において指導教員を中心に個々の教育実習生の課題を把握し、各教科・実習部・管理職と協力体制をとる。	課題を持った学生に対しても早期に指導、対応、報告を行っていた。「学生と触れ合う機会が楽しい」と答えた生徒が77.8%と高いのに対し、「実習生の授業は興味・関心が高まる」の項目では否定的な回答が46.5%と約半数に上った。	指導に熱が入り、それに応えようとする学生の熱意で、学生の帰宅時間が遅くなることがあり帰宅が困難な状況があった。授業については、これまで以上に細やかな指導を心がけ、生徒にとって魅力的な授業となるよう助言をしていく。	B	大学との連携・協議も積極的に行う必要があるのではないかと。	A	実習生に係る課題を全体で共有化し、大学との連携を密に図る。
	②大学側と連携を図るとともに適切な評価を行う。	課題を持った学生に対しての情報共有を行うことができた。その結果として適切な評価を下すことができた。	教授と課題を持った学生に対しての情報共有は行えたが、実習の中間的な時期に大学側と状況を共有することが望まれる。	A	大学との連携を継続的に図っていただきたい。	A	大学と情報交換を行いながら、場合によっては、大学教員が実習生に直接相談活動をしていただく。

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	おおむね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校教育目標	人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成	自己点検評価を主体的に行う分掌
学校教育計画	7. 適切な組織運営、開かれた学校づくり、保護者・地域との連携	

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策	
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価		
(1)機能的・機動的な組織運営	①保護者の学校評価アンケートで90%以上の保護者が教育方針等に対して満足感をもつような学校運営をする。	教育課程・行事・設備等について、学年主任・各分掌の部長等、立場の違う視点で検討し、広く意見を求めている。また、運営委員会で各学年の現状を交流して協力・補完し、生徒一人一人が生かされる学校運営を目指している。	生徒のより一層の主体的な活動を促すよう、教員全体で共通認識を持ってあたる。	A	保護者の意見は聞きながらも、学校としての教育方針はぶれないようにすべきである。	A	学校の教育方針については、常に説明責任を有していることを意識するとともに、積極的に発信する。	運営・教務
	②ミドルリーダーが各分掌においてリーダーシップを発揮し、学校組織として報告・連絡・相談の機能を充実させる。	運営委員会の場で各分掌のリーダーとして提案をし、報告・連絡・相談を行う機会が充分にあった。管理職の助言の下、責任を持って組織の運営にあたった。	今後も組織が形骸化することなく、充分に機能するよう、意識付けをし続ける。	A	目標の達成に向けて、さらに方策を追求していただきたい。	A	運営委員会を中心に各分掌の情報共有及び部長・主任間の意思統一を図り、共通認識を図り機動的な組織を追求する。	運営・教務
(2)開かれた学校づくりの推進	①学習評価等の規準や進路情報、公文書等を適切に発信する。	しかるべき時期を逃さず、丁寧に情報を発信した。個別の問い合わせにも丁寧な対応を心がけた。	評価のあり方について、成績会議の場を利用して常に問題意識を持ち、評価基準や進路情報についてより一層開かれた学校づくりを目指す。	A	進路情報については、3年だけではなく、広く情報を提供していく必要がある。	A	進路情報について、PTA総会等、全学年の保護者が集う機会を利用し、積極的に発信していく。	教務・進路
	②学校評価について、積極的に公表する。また、学校HPのこまめな更新を行う。	学校評価の公表を前年度よりも綿密に行った。学校HPをこまめに更新した。	行事の続く時期にも、こまめにHPの更新が行われるよう、定期的にチェックをする。	A	こまめな更新が必要である。	A	発信したいことを精選しながらリアルタイムにHPの更新を行う。	教務
(3)保護者・地域との連携	①保護者の学校評価アンケートにおいて、90%以上の保護者が授業参観や学校行事等に参加しやすいと感じるようにする。	どの行事も非常に高い参加状況であった。	HPをさらに充実したものにし、行事の魅力や生徒の生き生きとした様子を紹介する。また、授業参観の機会を増やすことができないか、行事を精選しながら検討する。	A	保護者が学校行事等により参加しやすくなる工夫をお願いしたい。	A	進路情報の発信等、保護者が参加して有意義であったと感じられる行事の在り方を追求する。また、授業参観の機会を増やす。	教務・PTA
	②PTA活動が活発になるよう学校として支援を行う。(保護者の学校評価アンケートにおいて、90%以上の保護者がPTA活動に対し満足度をもつ)	全体への呼びかけを行うと同時に、生徒会との共同作業や、教員のより積極的な参加を促し、PTA活動の活性化を図った。PTA実行委員と連携し、HPのこまめな更新につとめた。	HPや保護者と直接ふれあう機会に、PTA活動の成果などを積極的に発信する。	A	PTA活動は積極的に活発におこなわれていることを評価したい。	A	より多くの保護者が参加できるPTA活動を学校と連携しながら追求していく。	教務・PTA